

デイヴィッド・マレット

## 2 マーガレットの亡霊

夜が明けなんとする  
厳かな静寂の時  
マーガレットの不気味な亡霊が忍び込んで  
ウィリアムのベッドの足元に立った

<sup>かんばせ</sup>顔は <sup>い</sup>凍てつく雲がかかる  
四月の <sup>あした</sup>朝のよう 5  
黒いベールを持ち上げる白ユリの手は  
土のごとく冷たく

若さと年月が過ぎゆくと  
どんなに美しい <sup>かんばせ</sup>顔 もこのようになる 10  
死んで王冠を脱いでなお王が <sup>まと</sup>纏う  
ローブも <sup>か</sup>斯くやと

かつてその肌は  
朝露にきらめき開く花のよう  
頬は 今まさに開かんとする 15  
バラの蕾のようであった

しかし恋が まるで毛虫のように  
花開く前の <sup>むしば</sup>蕾を虫喰んで  
青白くなった頬からはバラ色失せて  
マーガレットは 花咲く前に <sup>い</sup>逝ってしまった 20

「さあ起きて あなたの <sup>まこと</sup>真の恋人ですよ  
真夜中のお墓から戻ってきたの  
どうか 哀れと思って聞いてください  
愛を <sup>こば</sup>拒まれた娘の声を

今は 傷ついた亡霊たちが不満を訴える 25  
まだ明けやらぬ もの侘しい時刻

死んだものたちが 大きく口を開けた墓から吐き出され  
不実な恋人を訪ねる時刻なのです

ウィリアム あなたの過ちを思い起こして  
愛を誓いながら その約束をあなたが破ったことを 30  
わたしの乙女の誓いを 返してちょうだい  
わたしの<sup>まごころ</sup>真心を返してちょうだい

どうして わたしへの愛を約束しながら  
その約束を守らなかったの  
どうして わたしの目が輝いていると言いながら 35  
その目を涙で曇らせたの

どうして この<sup>かんばせ</sup>顔を綺麗と言いながら  
それを見捨てたの  
どうして わたしの乙女心<sup>つか</sup>を掴みながら  
その心が壊れるままになさったの 40

どうして わたしの唇を甘いと言いながら  
その深紅の花びらを青ざめさせたの  
一体どうして わたしのような初<sup>うぶ</sup>な女が  
甘い言葉を信じてしまったのかしら

ああ <sup>かんばせ</sup>顔 <sup>あ</sup>は色褪せ 45  
唇も もはや深紅<sup>あか</sup>くありません  
目はどんよりと 今や死の衣に包まれています  
かつての魅力は ことごとく消え去りました

飢えた蛆虫がわたしの仲間  
わたしが纏<sup>まと</sup>っているのは経帷子<sup>きょうかたびら</sup> 50  
夜が 冷たく悲しく過ぎてゆきます  
そして 最期<sup>さいご</sup>の朝がやってきます

ほら <sup>おんどり</sup>雄鶏が立ち去れと言っています  
いよいよ永遠<sup>とわ</sup>のお別れです  
不実なあなたを愛して死んだ女が横たわる 55  
お墓の中を覗きにいらして」

雲雀が甲高くさえずり 朝日が微笑み  
薔薇色の光が降り注いだ  
ウィリアムは 顔青ざめて手足を震わせ  
喚きながらベッドを出た

60

ウィリアムは死に場所に急いだ  
マーガレットが横たわっている場所  
そうして 息絶えた亡骸を包んでいる  
青い芝地の上に身を横たえた

三度 ウィリアムはマーガレットの名を呼んで  
三度 激しく泣いた  
それから 冷たい墓石に頬を寄せて  
事切れたのであった

65

(山中光義訳)